

同人作品

街の灯 秋山義仁

街の灯が届く場所まで下りて来た今度は露地裏日陰花

菜の花が散っては咲いた田舎道寄り添う親子手つなぎ歌う

風の吹く大湯山オオユの尾環状列石記憶が消えて五千年今よみがえる

日を受けて土手に咲き誇る曼殊沙華紅は母さん白は父さん

北上川カワ超えて海まで続くこの高地人去り戻らずただ静寂

つつじ咲き黒揚羽とぶこの里に家は八軒人はババ二人

雪囲い雪虫雪んこ雪女郎僕の愛した女ここに棲む

身構えて陽は山に入り身を閉じる庭に差す陽は濃さを増し土へ

霜月の尖^{トガ}る心に身は持たず散り治めし銀杏葉身にまとう
寒いから土地がないから北上の家は小さく隣は遠い

ソーダと So in Love 石邊綾子

パチパチとソーダの炭酸わたくしを威嚇するかのように弾ける
飲み干してしまえ今宵は何もかも刺激が喉を叩くけれども

またひとつ記憶の襷から柚子の香が込み上げてくるソーダとともに
日曜の夜が終われば So in Love 非日常の余韻残して

後悔はしないと言ったら嘘になるあの日わたしの『ある愛の詩』
『帰らざる河』は流れる金の街わたしの欲も深くどこまで

ひまわりと太陽みたいにこの夏はずっとあなたに視線くぎづけ
炭酸が抜けてしまえば何だろうただの水ではないはずだけど

夢中とは夢の中なりソーダ水弾けていたころ何も知らずに
忘れない父母の横顔ブラウン管の向こうにみえた本当のこと

散水 井上省吾

水瓶に溜た雨水利用して収穫をした野菜を洗う

雨水をタンクに入れて溜ておき庭や畑に散水をする

水道のホースを伸ばし水を撒乾いた土にたつぷりとやる

夏の日のカラカラ天気水不足梅や柿の木もや梨の木

暑い日の畑仕事や草取りは涼しい時間手早く済ませ

二メートル高さ揃えて剪定し種から植えた果実楽しみ

枝抜きしすつきりとした実の成る木来年こそは期待ふくらむ

仕事おえシャワーを浴びて汗流し氷食わえて体を冷す

夏一夜 熊谷恒樹

戦争やコロナ災害禍事と続くニュースの夜は熱帯夜

白む窓開ければ鳥や虫の声緑の木々に吹く涼風の

扇風機 甲村雅俊

雨の降る霊送りしてわが夏は海の彼方に流れてゆくか

クーラーをつけず裸で夜を過ごすわが腹のうへ猫の乗りくる

みぎひだり首振りながら扇風機は真夏の夜を孤独に動く

わが眠る夜にくるくる扇風機まはれ魔物を寄せつけぬため

きつぱりと自由自在のつもりでも人生だけはキャンセルできぬ

釈迦弥陀の慈悲にすがりて明日を生くわが罪障のあまりに重く

ことさらに自虐したくはなけれども虚仮の不実のわれかと思ふ

歳月を数ふればこの冷蔵庫使ひ続けて二十八年

帰命尽十方無碍光如来わが心からあふぎみるなり

自動手記

グリップを薄く握りてフオアハンド肩の力を抜いて振るべし
来ない歌わが待ちにけり大胆に余白をさらに広く取りつつ
いくらでも歌は作れるたはやすく自動手記人形ならねども

「観経」に父を殺害せしものが一万八千！ 凡庸だらう

マザコンの手作り銃が火を吹きてパンドラの箱開きたるらむ
垂乳根のマザーグースで十人のそして歌人はみなくなるのか
一粒も無駄にしたくはない夜に炊飯器から米がこぼれる
ゆく夏にわが自己愛を取り戻し毛繕ひする猫を見てをり

S F / すこしふしぎ 浜谷独人

百年前ぼくが灯台だったころ送ったあかりが馴れ初めでした

地図にない前人未踏の宝島の隣町から中継します

スプーンとフォークとカーブとストレートがスリーポイント決めたような日

夏も逝く 氷室敬子

大ばんのバスタオルは洗いたて身にまいてベッドにすべりこむ

ひとはちに無数の花とつぼみ母よ元気になれと赤いカーネーション

卓上にかざりつけられたピンクのカーネーション家族をこわすなど

夏も逝き動く車にのせられて橋わたりゆく明るくはないクリニックへ

キッチンに立てば元気になれるよと励ましてくれる夏野菜ナスに

こんなにもふっくら柔らかく仕上げる人を信じている

短い梅雨 本田洋子

降りしきる雨にひらひらガク紫陽花関東地方今日が梅雨入り

梅雨寒に冬物一枚引き出しぬ鼻の冷たさ耳の冷たさ

ホトトギス声はすれども姿なくテッペンカケタカ深山みやまにありて

大木でたわわに稔りし枇杷の実の縄張り競う鳥の大群

驚きぬたった一日ひとひで枇杷の実を一つたりとも鳥残さず

灼熱の太陽先に照り出して短かかったね今年の梅雨は

百日草

それとなくいつもの人の寄り来るは 頼み事有り選挙近くて

多忙なり花に心が回らねど 今夏は植えし百日草を

戻り梅雨明けて太陽ひよしに布団干し その夜は熱くて身を置けもせず

流れ来る真夏の夜明けのメヌエット まだゆらゆらと脳は眠れり

塩入れて茹でて青々枝豆の 鞘が弾けて丸い実の出る

連日の危険な暑さでぐったりと 今朝は涼しく雨模様なり

塩かけてきゅうり一本丸かじり 川で冷やした田舎の想い出

叢に確かに聴いた虫の声 暦を見れば今日は立秋

お盆あり終戦の日あり墓参り 葉月八月魂の彩いろ

四十は男の厄年 若杉ゆき

今やっと静養の中自分を取り戻し笑顔の君になったね

茜さす 夕暮れ空に渡り鳥なく声もあつという間かき消されて

四十の厄年男三人が実息子、義息子二人

四十でも遅くはないよ人生を取り戻してよ君ならできる！

あなたは過干渉だ！と言われても幾つになっても止められないの

ふりむけば想い出達が駆けてゆく目蓋の裏をエンドレスにて

誰よりも愛しい人よこの手離さないでね心のそばにいて

陽の当たる庭なのに上手く咲けない花があるのは何故なのだろう

咲かせるの私の花は愛する力で！咲かせるの信じる力で！

この夏はいやな事件が多すぎた！早く季節変わってくれ